

福岡市那珂川に架橋された噴泉橋の変遷

石橋 知也¹・柴田 久²

¹正会員 福岡大学助教 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1)

E-mail:tomoya@fukuoka-u.ac.jp

²正会員 福岡大学教授 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1)

E-mail:hisashi@fukuoka-u.ac.jp

本研究では幻の橋と称される噴泉橋の変遷を明らかにするため、噴泉橋が存在していたとされる時期の前後を含む歴史年表ならびに福岡市街地図等の史料に基づいて分析し、ヒアリング調査による補完も行った。その結果、噴泉橋の変遷については三つの時期に分けて説明でき、噴泉橋が実在したことを裏付ける写真等を把握し、噴泉橋は個人事業主によって架けられた民間橋であることを明らかにした。また、噴泉橋が流出したのち付近に別の橋梁が建設されたため噴泉橋再建には至らなかったこと、大正初期から昭和初期にかけて現在の那珂川中洲地区の空間的な基盤が形成されたことを示唆した。

Key Words : Nakagawa-River, Funsenbashi-Bridge, transition, Fukuoka-City, maps

1. 研究の背景と目的

福岡市の那珂川にはかつて噴泉橋という「幻の橋」が存在していたとされる¹⁾。郷土史等の文献には多少の記述があるものの、この橋に関する情報は詳らかにされていない。都市河川や中洲といった地理的特徴をもつ福岡市の中心地において、往時、人々はどのように地区をつなげようとしたか、どのように橋梁が建設されたのかを明らかにすることは土木史的にも重要な研究課題である。

以上の背景を踏まえ、本研究では幻の橋と称される噴泉橋の変遷を明らかにするため、資料と地図に基づく歴史分析を行う。さらに、その変遷からみえてくる往時の中洲地区や那珂川の状況について考察を試みる。

2. 研究方法

本研究は噴泉橋の変遷を明らかにするために次のように進めた。まず1)文献資料^{2),3)}を精読することによって噴泉橋が存在していたとされる時期の前後を含む歴史年表を作成した。次に2)関連する時期に作成された福岡市街地図を分析対象に那珂川に架かる橋梁の位置、橋梁名、周辺地区の道路網等を確認した。さらに3)上記作業を補完するためのヒアリング調査を行った。ヒアリング対象者は表-1に示す。4)調査結果を踏まえ考察を行った。

3. 噴泉橋の架橋時期前後の歴史的状況

文献資料をもとに作成した歴史年表を表-2に示す。ここでは、噴泉橋の有無に対応させ、便宜的に「架橋前期」「存在期」「消失後期」の三つの時期に分けて説明する。各時代における空間的状況(地図)については次章で後述する。

(1) 噴泉橋の架橋前期

a) 大正初期から中期にかけて発展した福岡市

明治初期には福岡市中洲地区の南新地に県立勸業試験場(農事試験場)や測候所(気象観測所)があった場所とは考えられないほど街並みが変化していく⁴⁾。1914年に御大典祝賀会、1915年に九州沖縄勸業共進会(福岡市主催)、1916年に陸軍特別大演習、1918年に九州沖縄物産共進会(福岡事業団体主催)が相次いで開催されるなど、大正初期から中期にかけて福岡市は大きく発展した⁵⁾。特に1916年の大陸軍特別大演習では演習に参加する駐屯部隊と演習見物を見るために市内へ流れ込んだ人をあわせて約20万人となり、福岡市は賑わった⁶⁾。また、1914～1918年の

表-1 ヒアリング調査対象者

所 属	氏 名	備 考
博多荘	井上倫清氏	中洲地区における飲食店経営者
フタバスタジオ	山田卓氏	住吉地区における老舗写真店店主
合資会社アソシエ	益田啓一郎氏	歴史研究家・絵葉書収集家
門田提灯店	門田昭三氏	春吉地区における老舗提灯店店主

表-2 噴泉橋の架橋時期前後における歴史年表

西暦(和暦)	●福岡の出来事, ■中洲の出来事, ▲南新地の出来事
1913(大正2)	▲“南新橋”渡初式開催. ▲南新地入口に“別府分泉浴場”が落成開業.
1914(大正3)	●第一次世界大戦開始.
1915(大正4)	●御大典祝賀会開催. ●九州沖縄勸業共進会(福岡市主催)開催.
1916(大正5)	●陸軍特別大演習実施.
1917(大正6)	■“那珂川川開き”開始. ■“雇女兼番”全廃方針決定. ▲仮橋を市営の橋と認可.“南新橋”と命名.
1918(大正7)	●九州沖縄物産共進会(福岡事業団体主催)開催. ▲違法の売春で雇女券番(南券)消失.
1919(大正8)	■花柳界に対する取り締まり強化.
1920(大正9)	●工業博覧会(九州電気協会・化学工業協会主催)開催. ▲噴泉浴場を南新地に設立計画. ●第一回国勢調査の実施. 福岡市世帯数18023戸, 人口95639人.
1921(大正10)	▲噴泉浴場の護岸工事に着手.(資本金20万円) ●福岡電車“箱崎-工科前”開通.
1922(大正11)	▲噴泉浴場が落成開業. ▲噴泉浴場の料理部, 料亭“那珂川”を新築. ●住吉町が福岡市に編入. ■コレラ流行
1923(大正12)	●博多郵便局が開局.
1924(大正13)	●旅客機飛ぶ(百道海岸から福岡-大阪間 運賃30円).
1925(大正14)	▲清流橋の架橋.
1926 (大正15/昭和1)	■第一回寒中水泳, 那珂川で開催.(参加者510名) ■那珂川の貸ボート屋設立(7軒, 150隻). ■那珂川花火大会を水鏡天満宮夏祭り余興として開催. ■東中洲の地価が九州一となる. ▲噴泉橋の架橋.
1927(昭和2)	■那珂川花火大会を水鏡天満宮夏祭り余興として開催. ■福岡で最初の発声映画を九州劇場で公開.
1928(昭和3)	■那珂川花火大会を水鏡天満宮夏祭り余興として開催. ■中洲夜市の許可. (博多川沿い, 明治橋-水車橋間小屋掛け露天市)
1929(昭和4)	▲料亭“那珂川”を新装し“清流荘”として開業.
1930(昭和5)	●“大濠公園”完成. ●福岡飛行場(名島)開所式開催. ▲那珂川の洪水, 噴泉橋崩壊の危機. ●九州初の信号機を天神町に設置.
1931(昭和6)	▲“噴泉浴場”を大改造増築し, “楽天閣”となる.
1932(昭和7)	
1933(昭和8)	
1934(昭和9)	▲那珂川の洪水で噴泉橋流失.(風速17メートルの暴風雨) ▲秘密ダンスホール市内4ヶ所を警察が調査.
1935(昭和10)	
1936(昭和11)	●九州鉄道の福岡駅(天神町・現西鉄福岡駅)が新築落成. ●福岡第一飛行場(雁ノ巣国際飛行場)開通.
1937(昭和12)	●博多部の電話が自動式となる.
1938(昭和13)	●初の空襲警戒警報が出る.(杭州より敵機東へ向かう) ●木炭自動車が出現. ●商店法実施(閉店22時となる). ■東中洲を商店法“特別地帯”へ許可. 23時まで営業許可.
1939(昭和14)	●第二次世界大戦開始. ●福岡市内に警報サイレンを設置.
1940(昭和15)	●第三次防空訓練を全国一斉に実施. ▲料亭“清流荘”を改造し“ホテル清流荘”となり新装開店.

第一次大戦では、石炭王国の福岡県にとっては空前の好況で、福岡市の景気は上がった⁷⁾.

b) コレラの流行

1922年に福岡市に突如として多数のコレラ患者が発生した⁸⁾. 特に中洲地域のコレラ患者が圧倒的に多かった⁹⁾. このコレラ流行によって中洲地区を囲む那珂川は危険地域となり周辺の人々が近寄りがたい場所となった¹⁰⁾. 那珂川取水の簡易水道を使用している那珂川周辺地域の人々にとっては、最も身近な恐ろしい事件であった¹¹⁾.

c) 南新橋と清流橋について

1913年, 上名島の住人柴田又三郎によって南新地から向島(筑紫郡住吉町紡績会社前)に通じる南新橋(当初, 名もない仮橋で, 後に南新橋として市営橋と認められる)が架橋された¹²⁾. 同年, 南新橋入口に別府分泉浴場と称する水明館が開業した. 1925年, 噴泉浴場から博多川を越えて向島へ渡るための清流橋が工費約3600円で架橋され, 交通の不便さが解消された¹³⁾. 図-1は完成した清流橋の初渡式の様子である¹⁴⁾. 南新橋と清流橋は現在も存在している.

d) 噴泉橋の架橋に至るまでの経緯

1920年, 那珂川噴泉浴場(以下, 噴泉浴場)の建設計画に関する新聞記事には, 「那珂川噴泉浴場設置, 九州電気装飾株式会社は南新地剣先地に那珂川の水をひき電気噴泉浴場を設置“那珂川噴泉浴場”と命名, 公衆浴場と家族浴場に分れ, 娯楽部も球戯場やビヤホールを設け, 階上2百畳敷大広間も設ける, 総経費20万円. 完成開業の目標を1921年10月初旬としたが, 遥かに遅れて落成したのは1922年3月であった. 工費は予定を上回って35万円を要する大建設となったが, 本館は大阪宝塚の噴泉浴場と同一型の立派な洋館造りであった. 内部構造は, まず階下の男湯浴槽は, 直径3間の円形で水量140石, 女湯は直径2間で水量110石, 中央の立像塔からは絶えず温湯が噴出して, 噴泉浴場を特徴づけた. その他ラジュームの薬湯, 砂湯, 蒸湯があり, 別に家族用の個室浴場が設けられていたが, 後に朝風呂にゆく芸妓を誘って密会に利用した遊び人が出てきた. 二階の休憩室には球戯場, 食堂(和洋), 理髪室, 売店, 東京汁粉屋などがあり, 舞台つきの演舞場では浪花節や俗曲や仁和加などの演芸が, 毎日昼夜休みなしに行われて湯上がりの客で賑わった. 入場料は大人10銭, 12歳以下5銭, 2歳以下2銭で終日入浴出来るが, 家族湯は40分間4人以下1円の特別料金であった. なお開業の3月8日初日は自祝のサービスで入浴無料とした。」と報じられた¹⁵⁾. 噴泉浴場の外装は図-2に, 内部の演舞場は図-3のような状況であった. 噴泉浴場の落成の同年(1922年), 中洲の最南端に当たる剣先地に, 噴泉浴場の料理部である料亭那珂川が新築された(図-4)¹⁶⁾. その後, 1925~26年頃にかけて, 噴泉浴場の経営者が, 春吉方面からの客を引き寄せるために, 南新地と春吉方面をつなぐ那珂川をわたる最短距離の橋を計

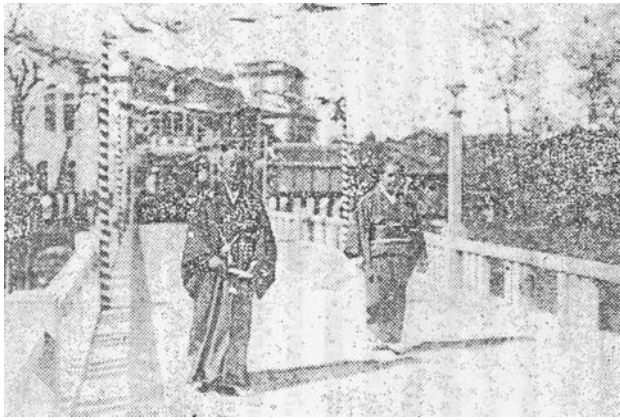


図-1 清流橋の初渡式の様子（文献2より）



図-2 噴泉浴場の外装（提供：アソシエ地図の資料館）



図-3 噴泉浴場の演舞場（提供：アソシエ地図の資料館）



図-4 料亭那珂川の外装（提供：アソシエ地図の資料館）

画し、経営者が自費によって噴泉橋を建設された¹⁷⁾。また、当時の状況を示した絵地図より噴泉橋の位置が確認できる（図-5）¹⁸⁾。

（2）噴泉橋の存在期

a) 噴泉浴場の変遷

昭和に入り那珂川噴泉浴場、料理部那珂川は経営不振で放棄閉鎖された¹⁹⁾。しかしその後、1929年に料理部那珂川は新装開業され清流荘、1931年に噴泉浴場は大改造増築され楽天閣（浴場兼ホテル）となる²⁰⁾。楽天閣に関する新聞報道には「楽天閣は浴場を普通湯、上等湯、特等湯の三つに分け、特等湯は室府の家族湯で1時間1円とし、上等湯は1回10銭で階上に休憩室の設備があり、普通湯は4銭である。又ホテルは和洋室間で1泊1円50銭迄とし食事は随意で大衆向きの食堂の設計もあり、外に撞球部には撞球、ピンポン、理髪部、売店等の設備があり、この外に川畔清風の眺望絶佳な借間があつて2時間70銭で貸与するといひ、全部が悉く大衆的に設備されている。」²¹⁾とあり、中洲の最南端に新しく誕生した清流荘と楽天閣は清流橋の往来を賑わ

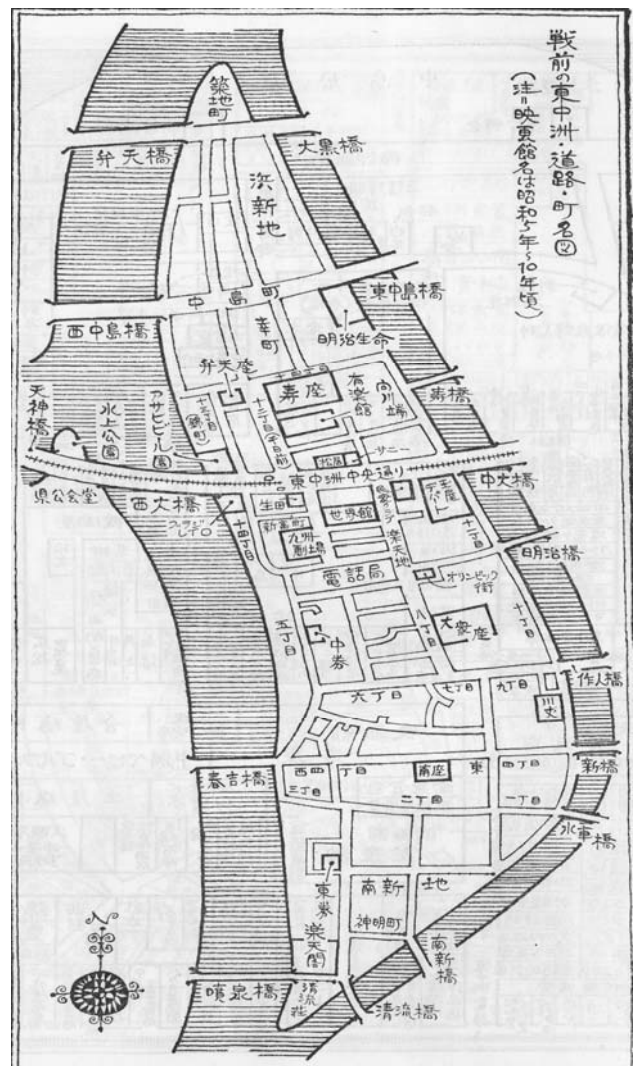


図-5 戦前の東中洲・道路と町名図（文献2より）

し、南新地一帯に新しい活気をもたらした²²⁾。

b) 那珂川における行事の開催

コレラも収束をみせる頃、1926年には那珂川で寒中水泳や那珂川花火大会などの川を舞台とした行事が開催された²³⁾。那珂川花火大会は1927、28年と連続で開催された。

c) 噴泉橋の特徴

前述したとおり、噴泉橋は民間橋であったため完成の記録などに関する情報がはっきりと残っていない。構造的には、噴泉橋は人ひとりが通れる程度の幅員を有する小さな木橋だった²⁴⁾とされ、同時期に存在した他の橋同様に、橋桁と橋脚は基本的に木材で造られ、水没する部分だけに石とセメントが用いられたと考えられる²⁵⁾。噴泉橋が架橋さ



図-6 大正初期の住吉橋（提供：アソシエ地図の資料館）



図-7 大正末期の住吉橋（提供：アソシエ地図の資料館）



図-8 那珂川寿橋、年代不明（提供：アソシエ地図の資料館）

れていた頃のメディアの最先端は絵葉書であり、図-6、図-7、図-8の絵葉書は往時の橋の様子を象徴するものである²⁶⁾。噴泉橋そのものの絵葉書は確認できないものの、これらの絵葉書から当時の噴泉橋がどのような橋であったか推測できよう。1930年発行の「福博名所案内写真帖」巻頭の空撮写真には、遠景ではあるものの噴泉橋を明確に確認することができる（図-9）²⁷⁾。また、往時の観光パンフレットにも噴泉橋を描いたものが確認された（図-10）²⁸⁾。

d) 噴泉橋の消失の顛末

1930年に発生した風速17メートルの暴風雨によって那珂川が増水し、噴泉橋下1尺まで水が達した。その際、上流に位置する住吉仮橋の材木が噴泉橋に引っ掛かり、事故防止のため通行止めになったものの、消防団らの働きで材木を押しわけ橋は流れずに済んでいる。一説には、その4年後にあたる1934年9月7～9日の3日間で233ミリという記録的な豪雨に見舞われ、発生した洪水によって噴泉橋は流失したとされる²⁹⁾。



図-9 1930年発行の「福博名所案内写真帖」巻頭の空撮写真にみる噴泉橋。写真手前側より東中洲、福岡玉屋、明治通り／写真中央から奥に向けて那珂川が流れ、下流（写真手前）側から上流（写真奥）側へ、順に西大橋、春吉橋、噴泉橋、住吉橋（提供：アソシエ地図の資料館）

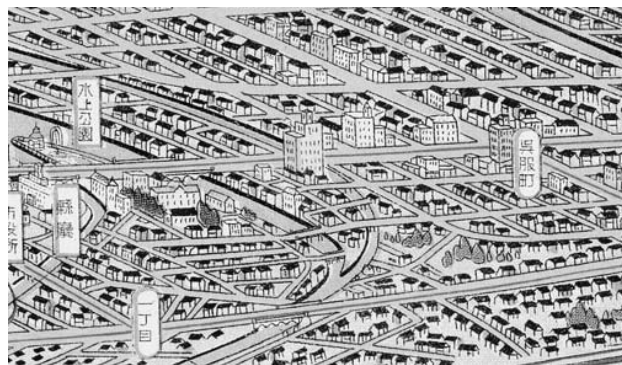


図-10 1934年発行の観光パンフレット「理想の楽土〔箱崎浜福岡港飛鳥埋立分譲地案内図〕」にみる噴泉橋（提供：アソシエ地図の資料館）

(3) 噴泉橋の消失後期

a) 戦争に関する出来事

噴泉橋が消失した後、第二次世界大戦開始と時を同じくして、福岡では空襲警戒警報が発令され、市内に警報サイレンが配置されるなど、戦争に関連した出来事が相次いで起こっている³⁰⁾。

b) 噴泉浴場のその後

前述した通り、噴泉浴場が楽天閣へ、噴泉浴場の料理部那珂川が清流荘へとかわった。その後、1940年に清流荘が新装開業されホテル清流荘、1942年には楽天閣が新装開業され大和ホテルとなった。しかし、1945年の福岡大空襲で両ホテルは焼失し、その後、清流の名前だけが残り現在の清流公園となった³¹⁾。

4. 福岡市街地図の分析と結果

噴泉橋が存在した時期の前後（大正後期から昭和前期にかけて）数年おきに更新された福岡市の古地図（福岡市街地図等）を分析対象に那珂川に架かる橋梁の位置、橋梁名、周辺地区の施設や道路網の変化等を確認した。

(1) 噴泉橋に関わる記載について

参考文献では1925～1926年頃に噴泉橋が架橋されたと前述したが、1925年（図-11）³²⁾、1926年（図-12）、1927年（図-13）、1929年（図-14）の地図では噴泉橋はまだ記されていない。噴泉橋ならびに噴泉浴場は、1930年の実測福岡市及近郊地図に初めて記されている（図-15）。これより、噴泉橋の架橋位置は、春吉地区の六番丁筋と噴泉浴場とを結ぶ延長線上であることが把握された。また、1931年（図-16）、1932年（図-17）、1934年（図-18）の地図においても噴泉橋の記載が確認されている。しかしながら、1935年の福岡市街地図には噴泉橋が記載されていない（図-19）。1935年以降から現在の地図にかけても噴泉橋は記されることはなかった。文献資料では1934年に噴泉橋は流失したと前述したが、地図より確認できた流失時期とはほぼ一致していた。

(2) 噴泉橋周辺の状況について

噴泉橋周辺の状況については、前節に示した地図より、大正後期から昭和初期にかけて、博多駅の位置、幹線道路の位置関係、路面電車網、河川形状、春吉地区の区割り等の基盤となる都市構造は大きく変化していないことがわかる。特異なところとしては、1939年の最新福岡市地図小形において、噴泉橋の架橋地点よりやや上流に那珂川橋が初めて記載される（図-20）。那珂川橋は公共の橋梁であり、その架橋位置は春吉地区の六軒屋筋と住吉地区とを結

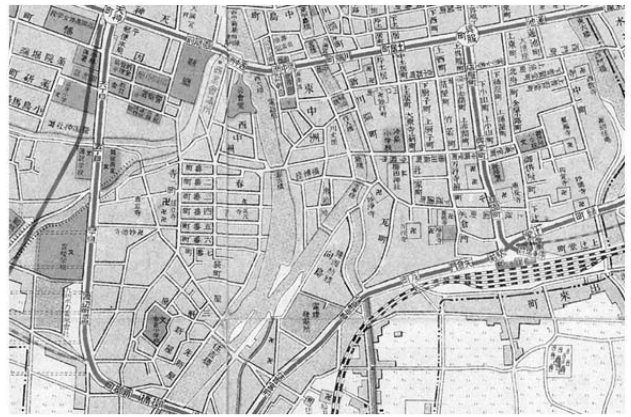


図-11 1925年(大正14年)最新福岡市街及郊外地図



図-12 1926年(大正15年)最新福岡市街及郊外地図



図-13 1927年(昭和2年)福岡市及付近図



図-14 1929年(昭和4年)最新校訂福岡市街地図



図-15 1930 年(昭和 5 年)実測福岡市及近郊地図



図-19 1935 年(昭和 10 年)福岡市街地図名所案内

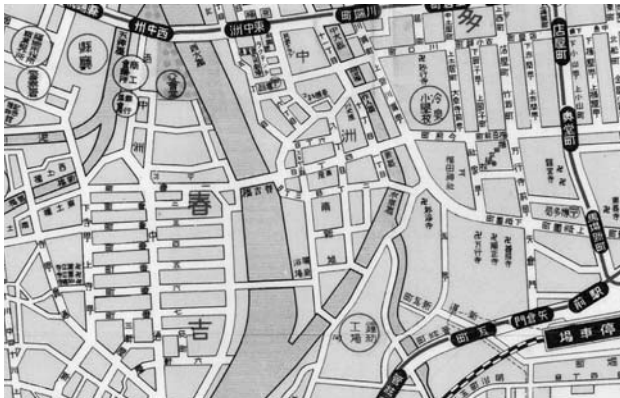


図-16 1931 年(昭和 6 年) 福岡市街地図



図-20 1939 年(昭和 14 年)最新福岡市地図小形

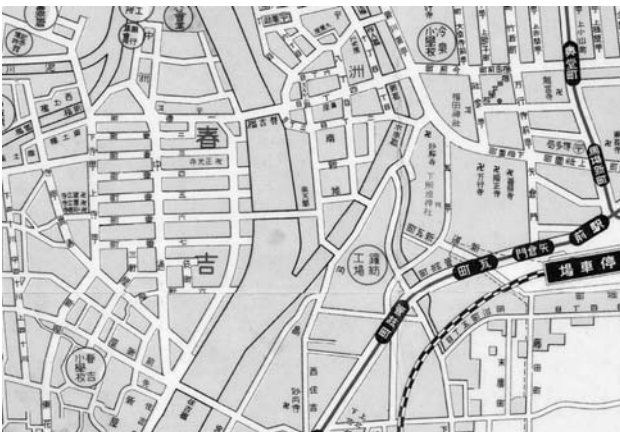


図-17 1932 年(昭和 7 年) 福岡市街地図



図-21 1940 年(昭和 15 年)最新福岡市地図改訂新版



図-18 1934 年(昭和 9 年) 最新福岡市街及郊外地

ぶ延長線上であることが把握された。なお、この那珂川橋は1940年以降の地図では「難の川橋（現難の川橋）」と橋名が変更されている（図-21）。難の川橋は小さな木橋であったが、1960年代に発生した台風によって一度流失し、その後コンクリートの橋として再建されたと言われている³³⁾。また1930年から1940年の地図において、南新地の施設に着目すると、噴泉浴場が最終的に楽天閣と清流荘になったことがわかる。

5. 噴泉橋の変遷に関する考察

(1) 噴泉橋が再現されなかった理由

第一に、噴泉橋は個人事業主によって架けられた民間橋であったことに注目したい。往時の社会情勢として、福岡市や福岡県は財政難に直面しており、渡辺与八郎の仕事³⁴⁾としても有名な道路建設（鉄道敷設）や橋梁建設においては、個人が主体となることも珍しくなかった。次に、噴泉橋の存在していた位置に着目すると、現在の春吉地区と清流公園を直結しており、河川によって隔たれた地区の容易な往来に寄与していたにも関わらず、噴泉橋は消失後に再建されることはなかった。これは、前述した公共の橋梁である那珂川橋（難之川橋）が新たに架けられ、その役割を取って代わられたことが一因であると考えられる。

(2) 那珂川中洲地区の基盤を形成した大正初期から昭和初期という時期

噴泉橋およびその周辺に関する変遷を整理し、噴泉橋の架橋前後の歴史を俯瞰すると、那珂川と博多川に架かる橋梁が頻繁に入れ替わった時期であることが把握された。その後現在に至るまで、橋梁の位置はほぼ変更されていない。これより現在の那珂川中洲地区の空間的な基盤が、大正初期から昭和初期（1910年代～1930年代）にかけて形成されたものと推察できよう。

6. おわりに

本研究で明らかにしたことを以下に示す。

1) 福岡市那珂川における噴泉橋の変遷については三つの時期に分けて説明でき、写真等によって噴泉橋が実在していたことを明らかにした。2) 噴泉橋が再建されなかったのは、後に那珂川橋が架橋されたことが一因であることを示唆した。3) 大正初期から昭和初期にかけて現在の那珂川中洲地区の空間的な基盤が形成されたものと推察した。

現在、福岡市では天神地区と博多地区の連携の必要性が大きな課題であり、両地区の間を流れる那珂川を活かしつつ、歩行者を中心とした回遊性を向上させるための政策提言の一つとして、「噴泉橋の再建」が注目されている³⁵⁾。天神・博多の両地区を繋ぐための橋を架橋することで、河川沿いプロムナードと橋とが一体となった回遊歩道が創出されることに加えて、かつて行われていた行事（那珂川花火大会など）の再現にもつながる可能性も考えられる。本研究の成果がその一助になることを願ってやまない。

謝辞：本研究を遂行するうえで、資料整理等の実質的な作業では福岡大学工学部社会デザイン工学科の深山友裕氏

（当時）の多大なる貢献があった。また、益田啓一郎氏にはヒアリング調査に加え、絵葉書等の貴重な資料提供をいただいた。さらにヒアリング調査において、井上倫清氏、山田卓氏、門田昭三氏に多大なるご協力をいただいた。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 例えば、春吉世間遺産マップ
- 2) 咲山恭三：博多中洲ものがたり（後編）―大正改元より空襲・終戦までの変遷―，文献出版，1980
- 3) 福岡文化連盟編著／伊藤研之・原田種夫編：画文集博多 明治・大正から昭和へ，創言社，1972
- 4) 前掲2) p.343
- 5) 前掲2) p.60
- 6) 前掲2) p.54
- 7) 前掲2) p.54
- 8) 前掲2) p.74
- 9) 前掲2) p.74
- 10) 前掲2) p.74
- 11) 前掲2) p.74
- 12) 前掲2) p.97
- 13) 前掲2) p.98
- 14) 前掲2) p.98
- 15) 前掲2) p.97
- 16) 前掲2) p.98
- 17) 前掲2) p.98, 附録 p.19
- 18) 前掲2) 附録（頁の記載なし）
- 19) 前掲2) p.99
- 20) 前掲2) p.99
- 21) 前掲2) p.99
- 22) 前掲2) p.100
- 23) 前掲2) p.77
- 24) 前掲2) 附録 p.19
- 25) 前掲3) pp.57-58
- 26) 益田啓一郎氏（合資会社アソシエ）へのヒアリング調査
- 27) 福岡名所案内写真帖，1930
- 28) 理想の楽土〔箱崎浜福岡港飛鳥埋立分譲地案内図〕，1934
- 29) 前掲2) 附録 p.19
- 30) 前掲2) p.458
- 31) 前掲2) 附録 p.19
- 32) 図-11～図-21は福岡県立図書館・近代福岡市街地図を参照 <http://www.lib.pref.fukuoka.jp/hp/tosho/kindai/index.html>
- 33) 山田卓氏（フタバスタジオ）へのヒアリング調査
- 34) 西日本新聞社編：博学博多ふくおか深発見，pp.116-117，2007
- 35) 福岡都市シーニックバイウェイ研究会編：回遊都心“カジュアルな福岡シティ”を提唱する―実現へ20の提言―，pp.45-56，2012（2016. 4. 11 受付）